

# ウインターオーバーシーディングにおける 品種選定と優良事例の紹介

雪印種苗(株) 千葉研究農場

作物研究室 主任 立花 正

## 1 はじめに

ウインターオーバーシーディング(以下WOS)は、ゴルフ場やJリーグのグラウンドといった競技場を中心に普及してきた技術です。このような背景から、言ってみれば、特殊な場所で、特別な機械を使って管理を行わないとできない技術という感をもたれています。しかし、今回この文中で事例としてご紹介している2例は、私達にとってはより身近な場所でのWOSの利用例ですので、ただ単にWOSの事例としてだけでなく、新たな考え方(発想)として参考になるのではないかと思います。

しかし、WOSを行うにあたって、その考え方と技術的な基礎知識を認識することは必須ですので、そのポイントについて理解をしていただきたいと思い、次項からご紹介しますので、参考にしてください。

## 2 ウインターオーバーシーディングとは

WOSは「冬期に葉が茶色に枯れてしまうノシバ、コウライシバのような暖地型の芝草が休眠する前の9~10月頃に、寒地型の芝草を播種する技術」です。そして翌年の4月以降は徐々に暖地型芝草の生育を促進し梅雨~夏の時期には再びノシバやコウライシバの芝生とします。

したがって、WOSは「生育パターンの異なる暖地型芝草と寒地型芝草のリレー栽培」ともいえます。

## 3 ウインターオーバーシーディングのポイント

WOSは前述したように暖地型芝草と寒地型

芝草のリレー栽培です。暖地型芝草と寒地型芝草は基本的に生育適温等の生育特性が全く異なり、その特性を理解し、上手に利用することが成功させる大きなポイントとなります。

### 1) 品種選定

WOSに使用する寒地型芝草に望まれる特性は、大きく下記の3点があげられます。

#### 発芽・初期生育が早い。

播種期が9月中旬から10月中又は下旬であり、かつ、その後の年内の生育期間も1~1.5カ月の短期間であることから播種した種子は速やかに発芽し、その後の生育も早いことが必要です。

#### 春の暖地型芝草への移行(トランジション)が速やかである。

4~5月は寒地型の芝草の生育が旺盛になる時期です。しかし、暖地型芝草の萌芽時期でもありますから、この時期の寒地型芝草の生育が余りにも旺盛ですと暖地型芝草の萌芽を抑制することになり、その後の暖地型芝草の密度が低くなってしまふことにつながります。したがって、播種する寒地型芝草は4月以降の生育が緩慢になり、かつ、密度が低下する草種又は品種が望まれ、いかに適正な管理をしたとしてもこのような特性を持ち合わせないものを選定するとWOSが成功しないこともあります。

#### 芝質が良い。

一般的に芝生としての評価は芝質によって決定します。しかし、WOSに関しては前述の、の特性をクリアした上で、芝質を問う事になり、いくら芝質が良くても暖地型芝草の生育を阻害するような品種はWOSには適さない事になります。

## 2) 品種特性

以下に当社の研究農場で試験を行い、WOSに  
適すると判断され、各地で好評を得ている品種に  
ついて特性を記載します。

### アニュアルライグラス「フェアウェイ」

「フェアウェイ」は発芽と初期生育が早く、春期  
のトランジションが速やかに行われ、暖地型芝  
草の生育を阻害することはありません。ペレニ  
アルライグラスに比較すると芝質は粗いもの、W  
OSを実施するには最も使いやすい品種です。

### ペレニアルライグラス「ピビットグリーン」

現在販売されているペレニアルライグラスの品  
種のほとんどは耐暑性、耐病性が強く、越夏性に  
優れる品種が多くなっています。このような品種  
をWOSに使用した場合にはトランジションが  
スムーズに行われず、暖地型芝草の生育に大きな  
ダメージを与えるのは必至です。しかしペレニ  
アルライグラスは芝質が良い点から近年のWOSで  
多く利用される草種でもあります。

「ピビットグリーン」はペレニアルライグラスの  
中では耐暑性に劣り、4月以降の密度低下も他の  
品種に比較すると速やかに進む特性をもつことか  
ら、暖地型芝草の生育への影響の少ないWOS専  
用のペレニアルライグラスといえます。

### ペレニアルライグラス「スリークォーター」

(新品種)

「ピビットグリーン」と同様にトランジション  
性に優れるWOS専用のペレニアルライグラスで  
あり、「ピビットグリーン」より葉色の濃い、より

見栄えのするタイプです。

**02年秋から本格販売を予定。**

### チューイングフェスク「パークラウン」

「パークラウン」の葉は非常に細く、低刈り適性  
に優れる品種です。繊細な芝生を形成することか  
ら、単播の他ペレニアルライグラスとの混播でも  
利用できます。

### イタリアンライグラス「ハナミワセ」

本品種は牧草用として開発された品種ですので  
極端な低刈りを要求する場面での利用はできませ  
ん。しかし、発芽が早く、かつ、春期のトランジ  
ションが非常に早い特性を持ちます。現在は主に  
競馬場(中山、東京、中京 等)で使用されてい  
ます。

### ペレニアルライグラス「APM」「アクセント」

「APM」「アクセント」は耐病性、越夏性に優  
れる品種ですから、トランジションを行うWOS  
での使用は控えます。しかし、WOSを行いなが  
ら暖地型芝草から寒地型芝草に草種を切り替え  
る目的の場合やゴルフ場のティグラウンドやグ  
リーンのような低刈りを要求する場面、又は場所  
によっては「ピビットグリーン」「スリークォ  
ーター」と混播し、葉色を濃くし、かつ、より緩  
やかにトランジションを行いたい場合に適する品  
種です。低刈りを要求する場面では「パークラ  
ウン」との混播も可能です。

## 3) 草種、品種の実際の使用方法

各草種、品種の特性を十分理解した上で、フロ  
ーチャート(図1参照)に示したようなWOSの目

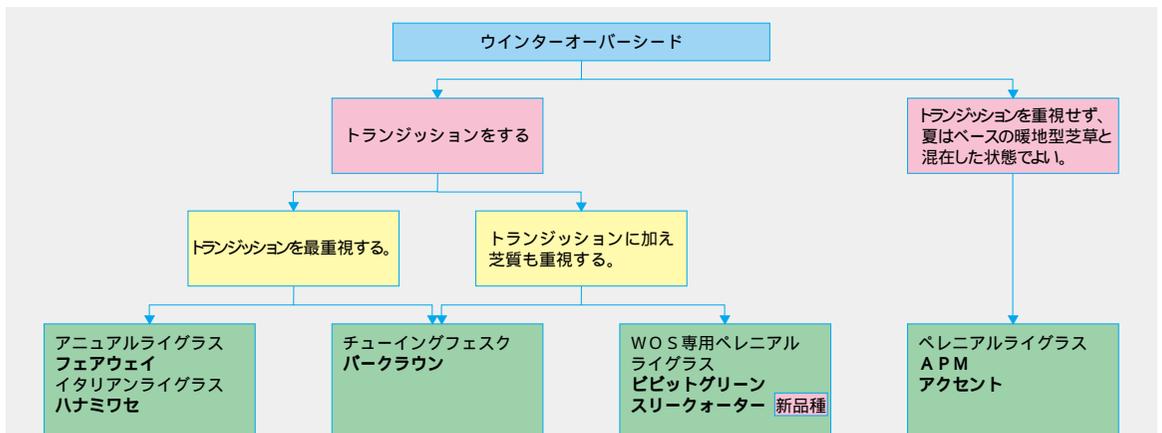


図1 ウィンターオーバーシードにおける品種選定のフローチャート

的と実際の播種場面に応じてどの品種を播種するかを決めます。さらに前述したように品種によって各々特徴があることから、その目的を達成するためには単播と合わせて混播も念頭に置いた設計を組むことも必要です。

#### 4) オーバーシード前の施肥と更新作業

WOSは生育中の暖地型芝草の上に、新たに寒地型芝草の「タネ」を播種することから、播種時に暖地型芝草の生育を抑制することが必要です。具体的な耕種的な手法としては、

WOSの予定日の約1カ月前から暖地型芝草への追肥を止める。

播種前には通常の刈高より低めに刈り、暖地型芝草の再生力を弱める。

バーチカルカット等によって暖地型芝草の芝の密度(芽数)を減らす、等の方法があります。

#### 5) オーバーシード後の施肥

通常の播種作業では種子を播く前に基肥として施肥を行います。WOSは暖地型芝草の中に種子を播くことから、基肥として肥料を施用すると暖地型芝草の生育を促進し、寒地型芝草の発芽や生育を抑制することがあります。したがって、WOSの場合には寒地型芝草の発芽が確認された時点から追肥を始めます。追肥量は窒素成分量で2~3g/m<sup>2</sup>・回(例:窒素含有量が10%の肥料の場合、20~30g/m<sup>2</sup>)を目安にします。ただし、1回目の追肥をする時期は、年次によっては気温が高く、暖地型芝草の生育が旺盛な場合もありますので、そのような場合には追肥をやや遅らせることも必要です。その後は12月までの短い期間で十分な芝生を形成させるために、肥料欠乏にならないように配慮した施肥管理をします。

#### 6) 春期のトランジション

春期の寒地型芝草から暖地型芝草へ切り替える時期の管理のポイントは、早春の追肥は極力控え寒地型芝草の生育を抑制することがあげられます。やむを得ず追肥をしなければならない場合には液肥等の速効性の肥料を少量使用し、遅くとも3月中に施肥を終わらせます。遅い時期の追肥は寒地型芝草の生育を促進し、結果的に暖地型芝草の萌芽を抑制してしまいます。また、この時期に

は肥料の抑制とあわせて、低刈りを行い再生力を抑えて寒地型芝草の密度を低下させるとともに、暖地型芝草の萌芽と生育を促します。また、浅いバーチカルカットやコアリング等の更新作業も有効です。

#### 7) ベース芝となる暖地型芝草

WOSをする際のベースとなる芝の種類も重要です。ベース芝として必要とされる特性としては、夏季の生育が旺盛であることはもちろんですが、春の萌芽やその後の再生力が旺盛な事も必要です。現在家庭や公園等で主に使用されているノシバ、コウライシバは春の萌芽や再生力がやや遅いことから、WOSを前提にした場合に、関東以西の暖地では再生力に優れる栄養繁殖性のティフトン芝や種子系パミュダグラスの「サンデビル」「ジャックポット」の使用をおすすめします。

### 4 使用事例

WOSはゴルフ場やサッカー場を中心に普及している緑化技術です。しかし、近年の緑化場面の多面化に伴って、家庭芝を始め、屋上での緑化場面や公園、学校の校庭等での利用に対する要望や問い合わせが増えつつあります。

一例として、鹿児島県の「健康の森公園」(鹿児島市)では、通常冬期間に褐色に枯れる花壇周辺のノシバにWOSを行うことによって、草花をより際立たせるとともに、冬期間にも芝生が緑であることから、来場する方々に好評を得ています(写真1~3参照)。



写真1 「健康の森公園」花壇の中心のWOS



写真2 「健康の森公園」花壇の下部をWOS  
上部は休眠中の野芝

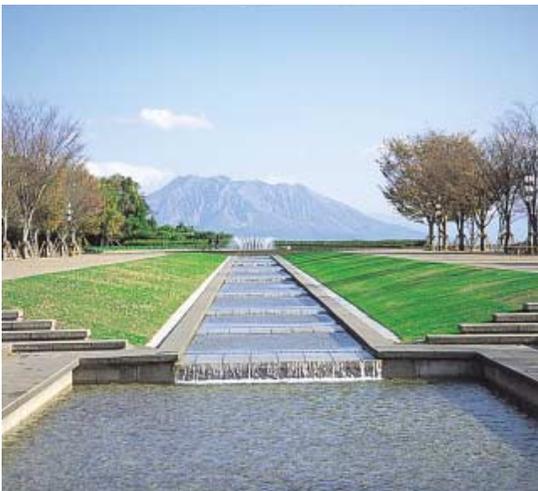


写真3 「健康の森公園」桜島を望む

また、「グローバルアリーナ」(福岡県宗像市。天然芝グラウンドと体育館や屋内練習場に宿泊所を併設した総合施設)においては、グラウンドは基より、宿泊施設周辺の芝生の緑地帯もWOSをしており、利用者の憩いの場ともなっています(写真4～5参照)。

このように、ゴルフ場やJリーグ等のサッカー場以外で、一般の方が直接芝生に触れることができる場所でWOSをすることによって、その施設の特徴づけができ、あわせて‘芝生’に対する関心が寄せられるものと思われます。

## 5 おわりに

ウインターオーバーシーディングは冬期間‘緑



写真4 「グローバルアリーナ」宿泊施設の中庭をWOS



写真5 「グローバルアリーナ」ラグビー・サッカー場のWOS

の芝生’の上でスポーツを行ったり、くつろいだりすることができ、また美観も優れます。それだけでなく、上手にウインターオーバーシーディングの技術を利用すれば冬期間の芝生を保護し、結果的にベースとなっている暖地型芝草の使用(生存)年数を長くすることにもつながります。

今回文中で御紹介したウインターオーバーシーディングの事例は、今までに報告が少ない試みであり、新しい考え方でもあります。

ウインターオーバーシーディングに限らず、緑花場面においては、適品種の利用と適切な管理技術で、今後なお一層‘緑の空間’が増えることを期待して止みません。